

令和7年度（2025年度）

病害虫発生予察情報

第1号

長期予報

北海道病害虫防除所 令和7年(2025年)3月28日

<http://www.agri.hro.or.jp/boujoshou/>

Tel:0123(89)2080・Fax:0123(89)2082

気象庁発表の2月25日付の暖候期予報および3月25日付の3か月予報は以下のとおりです。

北海道地方3か月・暖候期予報

（4月から8月までの天候見通し）

暖候期 令和7年2月25日

3か月 令和7年3月25日

気象庁発表

<気温の各階級の確率(%)>

[北海道日本海側]

4月	20	40	40
5月	20	40	40
6月	20	30	50
6～8月	10	30	60

[北海道オホーツク海側]

4月	20	40	40
5月	20	40	40
6月	20	40	40
6～8月	20	30	50

[北海道太平洋側]

4月	20	40	40
5月	20	40	40
6月	20	30	50
6～8月	10	30	60

低い

平年並

高い

<降水量の各階級の確率(%)>

[北海道日本海側]

4月	30	40	30
5月	30	40	30
6月	40	30	30
6～8月	30	30	40

[北海道オホーツク海側]

4月	30	40	30
5月	30	40	30
6月	30	40	30
6～8月	30	30	40

[北海道太平洋側]

4月	30	30	40
5月	30	40	30
6月	30	40	30
6～8月	30	30	40

少ない

平年並

多い

- 春（４月） : 北海道日本海側・オホーツク海側では、天気は数日の周期で変わるでしょう。北海道太平洋側では、天気は数日の周期で変わり、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。
- （５月） : 天気は数日の周期で変わるでしょう。
- 夏（６月） : 天気は数日の周期で変わるでしょう。
- （６月から８月） : 暖かい空気に覆われやすいため、夏の気温は高いでしょう。

令和7年度の病害虫の発生予想

注1) 平年値(過去10年間の平均値)と比較し、◎:やや多～多、□:並、△:やや少～少を示す

注2) あぶらな科野菜における近年の発生状況はキャベツでの発生量

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		R2	3	4	5	6	発生期	発生量
水稲	いもち病(葉)	△	△	△	□	□	やや早	やや少
	いもち病(穂)	△	△	△	□	□	やや早	やや少
	紋枯病	◎	△	◎	◎	□	やや早	やや多
	縞葉枯病	□	□	□	□	◎	—	やや多
	ばか苗病	□	□	□	△	□	—	並
	苗立枯病	□	□	□	□	□	—	並
	種子伝染性細菌病	△	△	△	△	□	—	並
	ニカメイガ	△	△	□	□	□	—	並
	ヒメトビウンカ	□	△	△	△	△	早	並
	イネドロオイムシ	△	△	△	△	△	早	少
	アカヒゲホソミドリカスミカメ	△	□	□	□	◎	早	多
	イネミギワバエ	□	△	△	△	△	やや早	少
	フタオビコヤガ	△	△	△	△	△	やや早	少
秋まき小麦	赤さび病	◎	◎	□	◎	◎	早	多
	うどんこ病	△	□	□	□	□	並	並
	眼紋病	△	△	□	◎	◎	—	やや少
	赤かび病	△	△	□	△	△	—	並
春まき小麦 (春まき)	赤かび病	□	△	□	△	△	—	並
	ムギキモグリバエ	□	◎	◎	◎	□	早	やや多
春まき小麦 (初冬まき)	赤かび病	△	△	△	△	△	—	並
	ムギキモグリバエ	△	△	□	◎	◎	早	多
大豆	べと病	△	△	□	□	△	やや早	やや少
	わい化病	□	△	△	△	◎	—	並
	マメシンクイガ	△	△	△	△	△	やや早	並
	食葉性鱗翅目幼虫	□	△	△	□	□	早	並
	タネバエ	□	□	□	□	◎	—	やや少
小豆	菌核病	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	灰色かび病	△	△	△	△	△	やや早	やや少
	茎疫病	△	△	□	△	△	—	並
	食葉性鱗翅目幼虫	△	△	□	◎	□	早	並
菜豆	菌核病	□	△	□	△	△	やや早	やや少
	灰色かび病	□	△	□	△	△	やや早	やや少
	黄化病	□	△	△	△	□	—	並
	タネバエ	△	△	□	□	△	—	やや少

作物名	病害虫名	近年の発生状況					本年の発生期・発生量	
		2	3	4	5	6	発生期	発生量
ばれいしょ	疫病	△	△	□	△	△	やや早	やや少
	軟腐病	△	△	□	◎	□	—	やや多
	黒あし病	□	△	□	□	□	—	並
	そうか病	□	◎	△	◎	◎	—	やや多
	粉状そうか病	□	△	□	△	△	—	並
	アブラムシ類	△	△	△	△	△	早	並
てんさい	褐斑病	△	△	◎	◎	◎	早	多
	根腐病(黒根病含)	△	△	△	△	△	—	やや多
	黄化病	△	△	△	△	△	—	少
	ヨトウガ (第1回)	◎	□	△	◎	□	早	やや多
	ヨトウガ (第2回)	□	△	△	◎	◎	やや早	やや多
たまねぎ	白斑葉枯病	△	△	△	△	△	やや早	並
	軟腐病	△	△	◎	◎	△	—	やや多
	乾腐病	△	△	△	△	△	—	並
	ハエ類(タマネギハエ、タネハエ)	◎	□	□	◎	△	—	少
	ネギアザミウマ	◎	□	△	◎	△	早	やや多
	ネギハモグリバエ	△	△	△	△	△	早	やや少
だいこん	軟腐病	□	△	□	◎	□	—	やや多
	キスジトビハムシ	△	◎	△	◎	△	—	並
あぶらな科 野菜 ^{注2)}	コナガ	△	□	△	△	△	やや早	やや多
	ヨトウガ	□	□	△	△	△	早	やや少
りんご	モニリア病	△	△	△	△	□	並	少
	黒星病	◎	△	△	△	△	やや早	やや少
	斑点落葉病	□	△	□	△	△	やや早	並
	腐らん病	◎	◎	◎	◎	◎	—	多
	ハマキムシ類	□	◎	△	△	△	早	少
	モモシンクイガ	△	△	△	□	□	早	並
	ハダニ類	△	◎	△	△	△	早	やや少
	キンモンホソガ	□	□	□	△	△	早	並

令和7年度に多発が予想される病害虫

1. 水稻の紋枯病

紋枯病（疑似紋枯症を含む）は高温多湿で多発しやすい。令和6年全道の発生量は平年並であったものの、本年は夏季の気温が高いと予報されており注意が必要である。窒素肥料の多用を避けると共に、前年に発生が確認されたほ場では出穂前の薬剤散布を実施する。

2. 水稻の縞葉枯病

縞葉枯病はヒメトビウンカにより媒介される。ウイルス保毒虫率が高いほど、また、本種の発生量が多いほど、縞葉枯病の発生は多くなる。本年のヒメトビウンカ発生量は平年並と予想されるが、一部地域では前年の縞葉枯病発生量が多かったことから、保毒虫率が高いと推測される。縞葉枯病常発地域においては媒介虫をおさえるためウンカ類に有効な箱施用剤を使用する。箱施用剤を使用できない場合は、移植後から6月上旬に水面施用剤または茎葉散布剤での防除を実施する。道外では、イミダクロプリド剤およびフィプロニル剤に抵抗性を持つヒメトビウンカ個体群が確認されている。道内でこれらの薬剤に対する抵抗性または感受性低下は確認されていないが、前年に薬剤の防除効果が十分に得られなかった場合には、本年は他の系統の薬剤に変更することを検討する。

3. 水稻のアカヒゲホソミドリカスミカメ

アカヒゲホソミドリカスミカメは出穂期頃に成虫が畦畔から本田に侵入し、成虫および幼虫が穂を加害して斑点米被害を生じさせる。高温少雨条件では、本田への侵入、増殖、加害が活発になる。前年の発生量は平年よりやや多いことから、越冬密度も平年よりやや高いと推測される。本年は暖候期（6～8月）の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されているため、本田への侵入は早く、発生量および被害は多くなるものと予想される。薬剤防除にあたっては出穂期の基幹防除が重要であり、多発時は適切な散布間隔での追加防除が必要である。

4. 小麦の赤さび病

赤さび病は高温多照で多発しやすい。本年は4月の気温が平年よりやや高いと予報されている。そのため、本病の発生に好適な条件となり初発時期が平年より早くなると予想される。また、5月の気温は平年よりやや高く、6月の気温は平年よりやや高いから高いと予報されていることから発生量は多いと予想される。令和6年は全道的に本病の多発が認められ、越冬する伝染源が多くなっていると推測される。これまで本病の多発リスクが低いとされていた地域においても、前年の発生が多かった場合など、多発が懸念される場合には、多発リスクが高い地域を想定した防除の実施を検討する。本病に対する薬剤防除は、令和6年指導参考事項「多発傾向に対応した秋まき小麦の赤さび病防除技術」を参考に、効果が高く残効の長いインピルフルキサム水和剤Fあるいはフルキサピロキサド水和剤Fで1回目の散布を次葉展葉期～止葉期に行い、開花始めに2回目の散布として赤かび病にも効果的なキャプタン・テブコナゾール水和剤あるいはプロチオコナゾール水和剤Fを用いることで効率的に防除できる。

5. 春まき小麦のムギキモグリバエ

ムギキモグリバエは、幼虫が小麦の茎内に侵入、加害する。生育初期の加害では無効分げつが増加し、出穂直前の加害では白穂や傷穂被害となる。また、出穂前の加害では出すくみ被害により有効穂数が減少するが、被害に気がつきにくい。春まき小麦では、は種が遅くなる程被害が大きくなりやすい。前年は本種の被害が春まき栽培では平年並であったものの初冬まき栽培での平年より多く、秋季も高温に経過したため越冬密度は高いと推測される。本年は融雪が早く進んでおり、また、春季の気温は平年よりやや高いと予報されていることから、第1回成虫の発生は早いと予想される。春まき小麦では早期は種（4月は種）に努め、6葉期頃までに茎葉散布を実施する。高温経過により小麦の生育が早く進む場合、防除適期を逸しないよう注意する。

6. ばれいしょの軟腐病

本病は7～8月が高温多雨の時に発生しやすい。本年は暖候期（6～8月）の気温は平年より高いと予報されている。降水量は平年並と予報されているものの、まとまった降雨があった場合には発生が多くなるおそれがある。茎葉の過繁茂を避けるために適切な施肥量とする。薬剤によっては感受性低下菌の発生が確認されているため、連用を避けてローテーション散布を心がける。

7. ばれいしょのそうか病

本病は塊茎形成期に地温が20℃以上と高く、土壌が乾燥気味に経過すると多発する。本年は暖候期（6～8月）の降水量は平年並と予報されているものの、気温は高いと予報されており、注意が必要である。無病の種いもを使用するほか、種いも消毒を励行するとともにばれいしょの過作を避けることが重要である。

8. てんさいの褐斑病

褐斑病は7～8月が高温多湿な年に発生が多くなる。本年は暖候期（6～8月）の気温が平年より高く、降水量は平年並と予報されている。また、前年の発生量は平年より多かったことから、感染源が多いと推測される。このため本病の発生時期は平年より早く、発生量は平年より多くなると予想される。天候の推移に注意し、今後の予察情報等を参考に適切に防除を行う。計画した散布開始時期以前に発病が確認された場合には直ちに薬剤散布を開始することが重要である。また、チオファネートメチル剤、QoI剤、DMI剤およびカスガマイシン剤では道内広く耐性菌が発生しているため、薬剤の選択には注意する。薬剤散布にあたってはマンゼブ剤を基幹とし、散布開始は初発期までに行う。薬剤の残効を考慮し適切な間隔で散布する（マンゼブ水和剤は14日以下、銅剤は7日以下）。耕種的対策（連作の回避、抵抗性“強”以上の品種を導入）に積極的に取り組む。なお、抵抗性“極強”品種では、発病株率が50%に達する前から8月下旬まで防除を実施することで、“強”品種の標準的な防除よりも発病を低く抑えることができる。

9. てんさいの根腐病（黒根病を含む）

いずれの病害も土壌伝染し、比較的気温が高く土壌水分が高いと発病が進みやすい。本年は暖候期（6～8月）の降水量は平年並と予報されているものの気温は高いと予報されており、本病の発生に好適な条件となる可能性がある。いずれも連作の回避や抵抗性品種の導入といった耕種的対策の他、薬剤による防除も有効である。また、根腐病では中耕の際に培土のように土が寄せられることで発病を助長するため注意が必要である。一方で黒根病では排水性を高めるための高うね処理が発病軽減に有効である。増肥や追肥は黒根病の発生を増加させるため、適正な施肥を心がける。

10. てんさいのヨトウガ

本種幼虫の加害開始時期は、6月下旬から7月上旬頃（第1回）と8月下旬から9月上旬頃（第2回）である。前年、第2回の発生量は平年よりやや多かったことから、越冬密度はやや高いものと推測される。本年は融雪が早く進んでおり、春季の気温は平年よりやや高く、降水量は平年並と予報されているため、第1回の幼虫発生期は平年より早く、発生量はやや多くなると予想される。また、暖候期（6～8月）の気温は高いと予報されていることから、第2回の幼虫発生期はやや早く、発生量はやや多くなると推測される。夏季高温年では夏季休眠により第2回成虫発生が9月にも認められ幼虫被害が遅い時期まで長引くことが危惧される。老熟幼虫に対しては薬剤の防除効果が劣るので、ほ場をよく観察し、早めの防除をこころがけるとともに、被害が長引く場合には追加の防除を実施する。

11. たまねぎの軟腐病

本病は6月下旬から7月上旬に曇雨天が続いたり、7～8月が高温多雨の時に発生しやすい。本年は暖候期（6～8月）の降水量は平年並と予報されているものの、気温は平年より高いと予報されていることから、まとまった降雨があった場合には発生が多くなるおそれがある。茎葉の過繁茂を避けるために適切な施肥量とする。薬剤によっては感受性低下菌の発生が確認されているため、連用を避けてローテーション散布を心がける。

12. たまねぎのネギアザミウマ

ネギアザミウマは、高温で早発・多発しやすく、少雨で多発が助長される。本年は暖候期（6～8月）の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されているため、発生期は早く、発生量はやや多くなるものと予想される。本種に対する薬剤防除は、適切な時期に開始すること、適切な防除間隔で効果の高い薬剤を使用することが重要である。たまねぎでは通常6月上旬以降に防除を開始するが、発生期は早いと予想されるため、被害が確認された場合には早くから防除を開始する。また、ピレスロイド剤抵抗性系統が道内の広い範囲で確認されており、他系統薬剤に関しても連用多用は避け、異なる系統の薬剤によるローテーション防除を徹底する。

13. だいこんの軟腐病

本年は暖候期（6～8月）の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されている。本病は高温・多雨の条件により発生が助長されるため、特に気温が高くなる夏どりの作型においては注意が必要である。抵抗性品種を栽培するとともに、窒素肥沃度の高いほ場では減肥し、適期収穫をこころがける。感受性低下菌の発生している薬剤もあるため、薬剤の選択にも注意する。

14. あぶらな科野菜のコナガ

コナガは道内では越冬が困難なため、春季に道外から飛来する個体群が発生源となる。本年は春季の気温がやや高いと予報されているため、第1回の幼虫発生がやや早くなると予想される。また、暖候期（6～8月）の気温は平年より高く、降水量は平年並と予報されているため、密度が高まるおそれがあり注意が必要である。近年ジアミド剤感受性低下個体群の飛来が確認されているものの、本系統剤の使用をコナガの世代内に1回以内とすることで感受性低下リスクを管理できる。適正な使用間隔の目安については令和5年指導参考事項「ジアミド系薬剤感受性低下個体群に対応したキャベツにおけるコナガの防除対策」を参照する。なお、抵抗性が発達することのないように異なる系統の薬剤によるローテーション防除を徹底する。

15. りんごの腐らん病

腐らん病は発病部位から病原菌の胞子が分散し、感染源となる。近年発生が多い状況が続いており、感染源が多いと推測される。このような状況から本病の発生量は平年より多いと予想される。春先には休眠期防除を実施する。感染源を除去するために、発病部位を見つけ次第、削り取りや切り落としを行う。特に夏季になると発病部位が見つらなくなるため、早期から園地の観察に努める。削り取り等で出来た傷口が病原菌の侵入口となるため、薬剤を含んだ癒合剤を塗布する。樹勢が弱ると感染しやすくなるため、樹勢を維持するために適切な栽培管理を行う。

トマトキバガの発生に注意してください

本種は前年発生が見られた地域ではハウス内で越冬している可能性があります。育苗中から観察に努め、葉に特徴的な被害（写真1、2）を認めたら速やかに薬剤防除を行うとともに、育苗期後半または定植時に灌漑剤や粒剤による防除を行ってください。

また本種は飛来性害虫であり、令和6年は春季から飛来が確認されました。前年発生が認められていなかった地域でも新たに発生することがありますので注意してください。

防除に関する情報は当所ホームページに掲載の令和6年度病害虫発生予察情報第19号（注意報第9号）をご覧ください。



写真1: トマト葉の食痕



写真2: 食痕と幼虫

本種は侵入警戒有害動植物です。新たに発生が疑われた場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センター、農業試験場、病害虫防除所に連絡し、発生種の確認を行ってください。